

川原寺の調査

— 第133-12次

1 はじめに

川原寺の創建は明確でなく、斉明天皇崩御（661）のち、大津宮遷都（667）までの間に、天智天皇が亡母・斉明の冥福を祈るため、斉明の飛鳥川原宮の故地に建てられたと考えられている。藤原宮期には、大官大寺・薬師寺・飛鳥寺とともに四大寺に挙げられる高い寺格を誇っていた。平城遷都後も飛鳥の地に残った川原寺は、その後寺格を下げ、平安時代には真言僧が管轄するようになる。承暦元年（1077）には東寺末寺になっていた。

川原寺の火災については、文献史料や後述する川原寺裏山遺跡出土遺物などから、9世紀中～後半、建久2年（1191）、室町時代後期の3度と考えられる。

川原寺周辺では、1957年度から2ヶ年3次にわたる中心伽藍の発掘調査¹⁾をはじめとし、それ以後におこなった小規模調査は50件以上にのぼる。2003年の調査では、鉄釜鑄造遺構とともに、寺域北限と考えられる掘立柱東西塀を検出し、寺域は南北3町（333m）の規模をもつことが判明した²⁾。

伽藍配置は、南大門、中門、中金堂、講堂を中軸線におき、中金堂の前方東側に塔を、西側に西金堂を相対させて、中門からのびた回廊（単廊）が、塔と西金堂を囲んで中金堂側面にとりつく。また講堂の背後と前庭部を僧房がとりかこみ、僧房には小子房が付属する（以上、『報告』）。1974年には東門を検出し、寺域東限が確定している（『藤原概報4』）。同年、中心伽藍北西の丘陵南斜面で関西大学などが発掘調査をおこない、寺の焼失後に廃棄したと考えられる塑像や磚仏などが焼土とともに多量に出土した³⁾。これを川原寺裏山遺跡と呼んでいる。

川原寺の現状は、中金堂跡に弘福寺が建ち、中金堂北西方、すなわち中金堂跡と講堂跡の中間西方には、光福寺という別の寺院が建つ。その他は発掘成果に基づき、礎石や基壇の復元整備がおこなわれている。

今回の調査は、光福寺庫裏の改築にともなう事前調査で、300年前に建てられたという庫裏を撤去して調査を開始した。1971年に製作した川原寺伽藍復元模型でも想定しているように、鐘楼もしくは経楼の遺構が予測されたため、建て替え部分全域にあたる、南北約12m、東西

約8.5mの面積約103㎡を調査した。調査は2005年2月2日に開始し、3月8日に終了した。

2 検出遺構

検出した遺構は、礎石建物1棟とその基壇外装、雨落溝、この建物の東側を流れる南北溝、土坑などである。

調査区内は後述のような改修もしくは新しい遺構のため、基本層序を把握しにくい。大勢は、①表土1（近世瓦を含む瓦礫層もしくは旧庫裏の土間、厚10cm）、②表土2（旧庫裏建設時の盛土、厚20cm）、③暗褐色砂質土（近世瓦や炭を含む堆積層、厚20cm）、④赤灰色～赤褐色砂質土（壁土を含む焼土層、③との漸移層を含め厚20～40cm、下面凹凸あり）となり、この下層は⑤それ以前の火災にともなう土層（大土坑）、もしくは建物基壇土となる。さらに下層は、⑥礎石建物創建時の整地層（明黄～青黄～青茶色粘質土、瓦を含む）、⑦川原寺創建頃の整地層（青茶～青灰色粘質土、瓦はないが加工痕のある木片を含む、飛鳥Ⅲ以後の土器出土、厚20cm）があり、その下層が、⑧地山（暗灰粘土、自然木を含む沼状の堆積土）となる。

検出した礎石上面の標高は116.7m前後で、地表下40cmにあり、遺構検出最上面は④層上面で、標高は基壇内・基壇外とも116.4m前後。⑦層上面の標高は115.6mである。⑤・⑥層の厚さは一定しない。

礎石建物SB700 調査区西北で検出した、コの字形に6個の礎石が並ぶ建物。礎石の間隔はいずれも2.1m（7尺）等間。直径1m前後、高さ3～5cmの円形柱座をつくり出し、柱座上面を平滑に仕上げる。東北隅の柱座上面には、焼失時に剥離したと考えられる円形の刻線があり、その径は50～60cmで、柱の太さを想像させる。もっとも大きな東南隅の礎石は、最大径が約1.6mある。これらは建物の東側柱および南北両妻にあたる柱の礎石と考えられ、発掘できなかったものの、少なくとも想定される西北隅柱とその1間南には、礎石の存在がピンボールの差し込み感触から確認でき、全体では南北3間（6.3m）×東西2間（4.2m）の南北棟とみられる。

後述するように、この建物の基壇南辺部は火災後の大土坑SK690で破壊・再構築されており、また一部の礎石は据え直されている。東南隅より1つ北方の礎石は、④層の焼土が礎石東方を大きくえぐっており、火災で割れた礎石の一部を撤去し、その際に栗石を入れて据え直し

ているようだ。東南隅の礎石も北方下部の形状から、当初の礎石が欠けたものと考えられる(図82)。東北隅の礎石は、③層と同じ土で礎石際を掘り込んでいるが、礎石を据え直すほど大きな穴ではなく、その下層には創建の礎石据付穴がみえ、創建以来動いていないと考えられる。他に礎石据付痕跡はなく、建物は創建規模を踏襲しているとみられる。

基壇外装 調査区中央やや南で、凝灰岩製基壇外装の東南隅を検出した(図84)。このうち南辺をSX701、東辺を

SX702とする。いずれも柱想定心からの出は2.6m前後(9尺)を測る。石材は幅15~20cm、長さ40~60cmで、東南隅の石は平面L字形に造り出す。すべてが直方体の上面外角を失って断面が三角形~台形を呈し、高さは15cm程度である。これらと礎石上面との標高差は25~30cm。上面内角に仕口の切り欠きをもつものの、石の幅が狭く、これらの石の下には石を重ねないことから、地覆石と羽目石を兼用した基壇外装と考えられる。

これらは、先述した焼土層④を切り込んで据え付けて

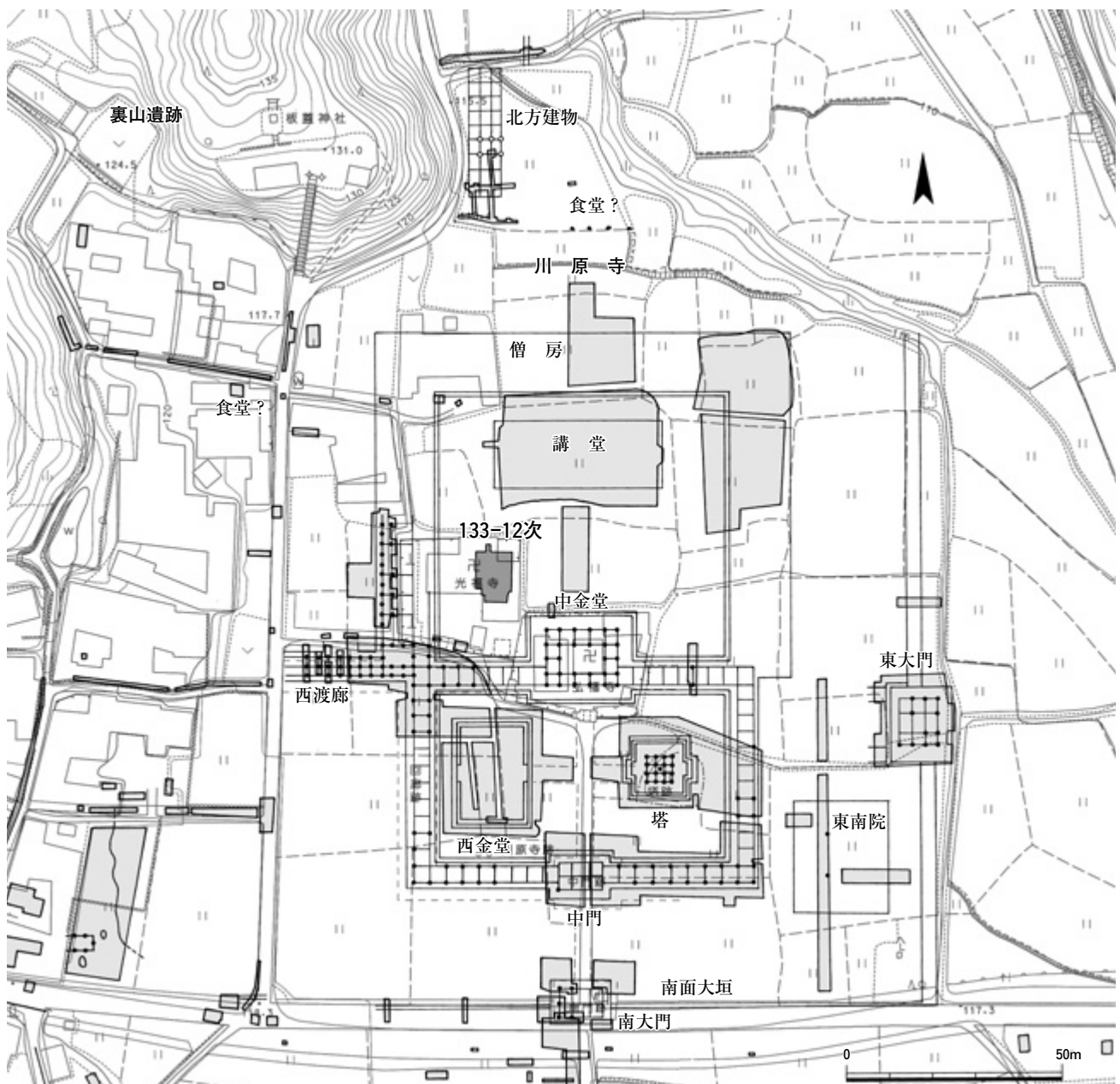


図80 第133-12次調査位置図 1:1500

おり、礎石据え直しの痕跡は④層の下で確認できるので、創建の基壇外装でないことは明らかである。幅がそろわず、かつ内面が荒れており、転用材とみられる。

雨落溝SD705 基壇南辺の凝灰岩石列SX701の南方にある東西溝。SB700の雨だれによる堆積土が、平面で溝状に見えるもので、明確な掘り込みはなく深さ10cm程度。数時期の堆積があるようだが時期差は明確でない。

雨落溝SD706 SD705とほぼ同位置にあり、焼土層④で覆われた東西溝。幅60cm、深さ20cm程度で、焼土層④を埋土としてやや蛇行するが、現状の凝灰岩石列よりも一

時期前の雨だれ痕跡と考えておく。SD705ともども、基壇東辺外側にもめぐると想定できるが、後述する素掘溝SD695のため明確でない。

玉石列SX680 礎石建物SB700の東方で検出した東西玉石列で（図85）、全長は約2.6m。長径40cmほどの玉石をSX702を挟んで4個確認したもので、その東端から北向きに、また西端から南向きに数個の石の抜取穴が並ぶ。焼土層④を除去して検出し、石の上面は凝灰岩石列SX702上面よりも10～15cm低く、標高116.25mほどである。石の据付穴はなく、SB700創建期の基壇土中に据えられ

ており、基壇築成と同時に施工していることがわかる。

平面位置はSB700の東南隅とその1間北にある礎石のほぼ中間にあり、内方の石の抜取穴外側は礎石心から約2.2m離れる。南方は次に述べる大土坑SK690で破壊されているため不明。これらは創建の基壇地覆石に相当すると考えられ、やや出が大きいきらいはあるが、基壇に登るためのスロープの突出と考えておきたい。西金堂や中門では、玉石を地覆石として凝灰岩製羽目石をのせる基壇の構造であり、同じ仕様とみられる。

大土坑SK690 焼土層④の下層にあり、SB700の東南隅礎石付近から南方で検出した大土坑。あるいはさらに北方まで広がる可能性もある（図82）。SB700の創建基壇南辺部を掘り込み、土坑埋土で建物の基壇を形成している。埋土は全般に赤褐色の焼壁土ブロックを含む砂質土で、黒灰茶色、黄灰色、橙黄色ほか数層に分層できる。この状態が建物基壇の外側まで広がるので、基壇土として埋めたものではないらしい。黒色は炭に由来

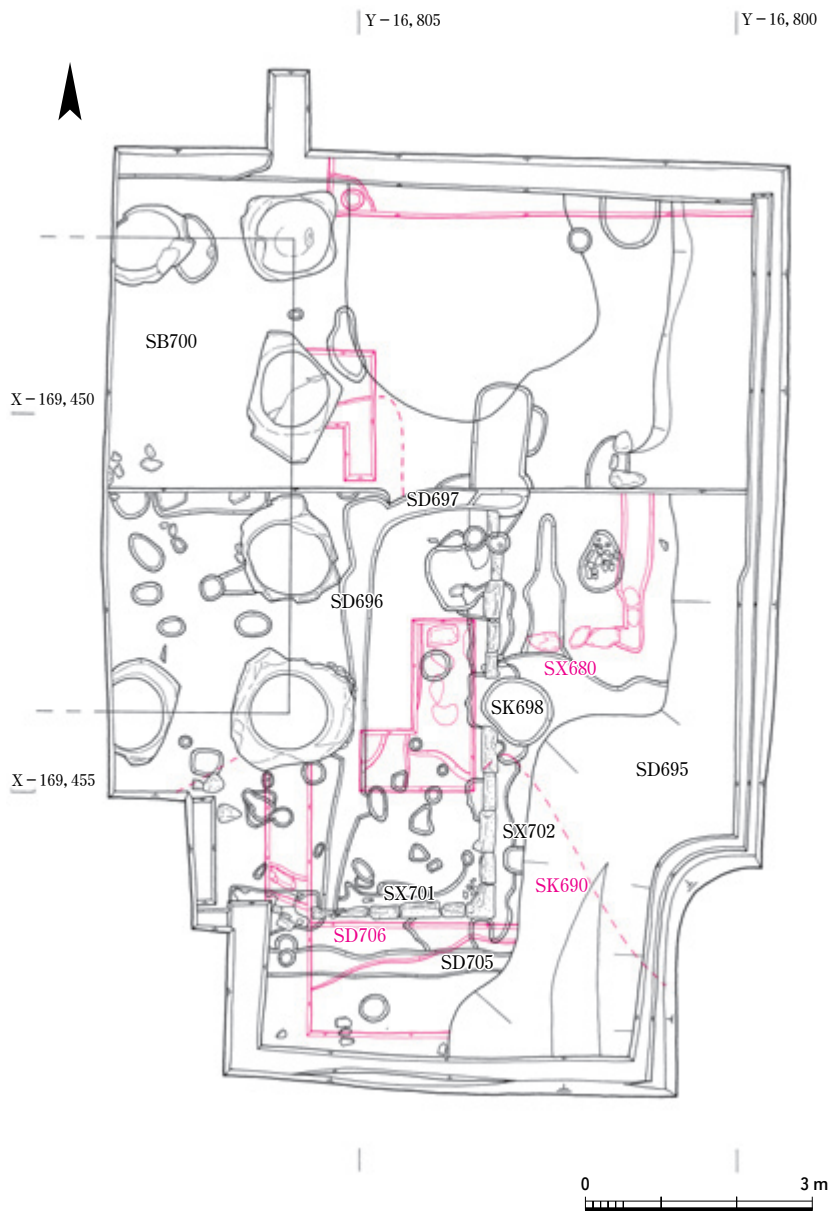


図81 第133-12次調査遺構図 1:100

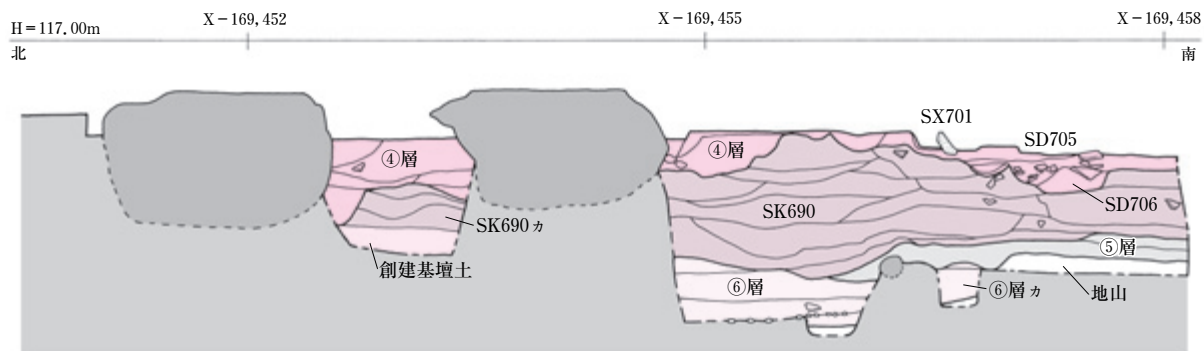


図82 SB700基壇南方の土層（西から） 1:50

し、赤褐色の焼壁土ブロックとあわせて、火災後の塵芥処理土坑とみられる。含まれる遺物には、創建軒瓦とともに、一枚作り縄叩きの平安前期の瓦があり、後述する磚仏も、この土坑の一層から集中的に出土した。

周囲の整地と基壇の築成 大土坑SK690の下層には、少量の瓦片を含むためSB700建立時の整地と解釈した⑥層がある。SK690同様、⑥層は基壇の外側にも広がるが、SK690埋土に特徴的な赤褐色焼壁土ブロックはない。SB700の東南隅礎石にかけた南北断割トレンチでは、⑥層の底部付近で凝灰岩基壇縁よりも約40cm内側に人頭大の河原石を検出しており（河原石上面の標高は115.6m）、それより内部を20cmほど掘りくぼめ、底に小礫を敷いているらしい。基壇南辺は大土坑SK690による破壊が大きく、基壇構築の詳細は明瞭でない。

調査区北壁際の断割トレンチでも、よく似た位置にやはり人頭大の河原石が置かれていた。ただし、ここでは内部の掘り込みや礫敷は確認できなかった。土層をみると、河原石付近で基壇内部の土層は亀腹状にとぎれ、その上に周囲の整地層がのっている。基壇は版築を施さず、黄青灰色～黄灰色の粘質土で、一部でその下層を掘ったことに由来する汚れがまじる。東北隅の礎石には基壇土を切り込む据付穴を確認できる。

なお、SB700建立時の整地⑥層の下層には、川原寺創建頃の整地と解釈した、飛鳥Ⅲ以降の土器小片を含む⑦層がある。⑦層上面が比較的平坦であり、旧地表をなす面を確認できないことから、SB700建立時に地表をいくらか掘り込んでいるとみられる。

以上から、基壇築成の手順は以下のように考えられる。まず、川原寺創建頃の整地でできた地表をいくらか掘り込み、若干標高の高い南方は、やや深く掘って小石を敷く。そして全面を薄く整地した後、河原石を据えて基壇範囲をほぼ確定させ、その内部に基壇土を積む。また、それと前後させながら周囲の整地もおこない、この過程で階段・基壇の玉石を据え付ける。礎石は基壇がある程度積み上がった後に据付穴を掘って据える。

素掘溝SD695 調査区の東辺を蛇行する素掘溝。西肩を検出し、幅2m以上、深さ60cm～1mで、暗灰色～暗青灰色粘質土を堆積土とする。講堂周辺でも検出した溝と同性格の遺構と考えられる。川原寺創建期の瓦をはじめとする遺物とともに近世陶磁が出土する。

南北溝SD696 礎石建物SB700東側柱の礎石東辺を北流する砂溝。幅60cm、深さ10cm。南辺の凝灰岩石列SX701を破壊し、SB700中央付近で東に折れて東西溝SD697となる。耕作にともなう溝とみられるが、遺物がなく時期



図83 SB700建物全景（南から）



図84 基壇外装（南から）



図85 玉石列SX680（東から）

は不明。

便槽SK698 南北凝灰岩石列SX702を破壊している円形土坑で、木桶状に木材が置かれていた。近世以降の便槽と考えられる。
(箱崎和久)

3 出土瓦磚類

軒瓦、丸平瓦、道具瓦、磚のほか、磚仏が出土した。なお、土器は小片が少量出土したのみである。

瓦 軒瓦は、創建期127点、平安時代12点、鎌倉時代6点、近世以降12点、がある。川原寺に関わる鎌倉時代以前の軒瓦は合計145点あり、うち88%が創建期の瓦。川原寺式軒丸瓦601型式は計58点(A種9点、B種3点、C種45点、E種1点)、四重弧紋軒平瓦651型式は43点(B種3点、C種3点、D種23点、E種14点)である。巨勢寺同範の611型式(5点)は、瓦範がかなり磨耗した段階の製品である。瓦当側面にカセ型の圧痕をとどめた例がある。

平安時代前期の軒平瓦752型式は、凸面に条の細い縄叩き痕と残すものと、ヘラケズリ調整するものがある。大和・坂田寺と巨勢寺に同範品がある。また、平安時代後期とされる783型式は、凸面に朱線が残っていた。

丸瓦は2,312点334.5kg、平瓦は8,451点900.5kg出土した。平瓦には4点の文字瓦がある。すべて、タテナデ調整を加えた凸面布目平瓦の凸面への篋書き。「及」「□□壬」「□有」などである。ほかに、篋書きのある平瓦8点もすべて創建期のもので「×」の記号が2点ある。

道具瓦には、『報告』で「土管」と紹介されているラップ形の半円筒形瓦製品3点がある。

磚 仏 合計164点(種別不明8点含む)の磚仏が出土した(巻頭図版3)。川原寺では従来からも磚仏は出土していたが、いずれの調査でも出土点数は1点か、せいぜい数点どまりであった。伽藍中枢部を発掘した1957～1959年の調査においても、1点しかみつかっていない⁴⁾。

多量の磚仏が出土したことで著名なのは、寺域西北部にある川原寺裏山遺跡である。約1,600点の磚仏が出土した⁵⁾。磚仏は、1点の大型独尊磚仏をのぞいて、すべて方形三尊磚仏A⁶⁾であった。

今回は点数において、川原寺裏山遺跡には及ばないとはいえ、それに次ぐ量である。そして、100点を超える磚仏出土例が、山田寺、橘寺、石光寺、二光寺廃寺(以上、大和)、夏見廃寺(伊賀)、東畑廃寺(美濃)にすぎないこ

と⁷⁾からも、今回の磚仏群は貴重である。

さらに、出土した磚仏群が、これまで川原寺では知られていなかった種類で構成されることも重要である。

磚仏は、小型独尊、方形三尊A、方形三尊B、火頭形三尊、そして大型磚仏および方形三尊と推定されるもの各1種類、の合計6種類がある。

小型独尊磚仏は、単弁五弁の蓮華座に座す通肩の如来座像と、頭上の天蓋を表現したものである。如来座像には、身光と頭光をあらわす。身光は円形で、表面にはわずかな膨らみがある。頭光は、周囲にC字形の忍冬紋が並ぶ。天蓋は、中央と左右に半肉彫りの忍冬紋を配置し、左右には房状の垂飾を吊り下げる。火を受けて焼損したものが多く、金箔や漆膜を残す例もある。釘孔はない。

その規格は、タテ4.1～4.3cm、ヨコ2.3～2.5cm、厚さ0.9～1.0cm、重量8g。合計128点が出土した。そのうち、完形品ないし完形にちかいものが30点ある。大和・唐招提寺戒壇院跡出土例(大脇H群)と同型である⁸⁾。

方形三尊磚仏Aは、川原寺裏山遺跡や橘寺から出土したものと同型品。長方形の区画に、定印を結び宣字座に椅座し蓮華座に足を置く如来像と、蓮華座にのる左右の両脇侍立像を表現した磚仏である(以下、左右は中尊を基準にする)。中尊の如来像は二重円形、脇侍は円形の頭光をもつ。中尊の上には天蓋があり、その下方および背後に菩提樹をあらわし、脇侍の頭上には舞い降りる飛天が表現されている。今回は、表土層から1/4大の破片など2点が出土した。いずれもひどく焼損する。

方形三尊磚仏Bは、川原寺では初出である。図像は方形三尊Aとほぼ同じだが、中尊の背後にある火炎紋の身光とC字形忍冬紋と幅線紋のある頭光、脇侍の蓮華座に表現された蓮子、そして飛天下方の唐草紋などが違いである。伊賀・夏見廃寺例や大和・木之本廃寺例などと同型の磚仏である。最大でも一辺5cmの破片しかないが、計19点出土した。金箔を残すものが2点ある一方、焼損した破片もある。なお、A・B不明の小片が1点ある。

火頭形三尊磚仏は、天蓋の端から逆時計回りに派生する唐草紋のみえる破片1点だけを確認した。裏面は剥離するが、カーブする側面が残る。大和・阿弥陀山寺例や河内・獅子窟寺裏山例と同型で、宝珠形の頭光を負う椅像の中尊をあらわす。ほかの同型品が周囲に分厚い縁取

りをもつものに対し、本例にはそれがない。

また、小型独尊磚仏ではなく、上記三尊磚仏3種とも一致しない破片1点がある。部位は不明。

以上の5種類が砂粒を含まない緻密な粘土であるのに対し、砂粒の多い粗悪な粘土で作られた一群がある(計4点)。同型品をみいだせないが、釘孔があるので磚仏と認めた。図像の多少わかる破片2点について述べる。

1つは、方形磚仏の向かって右下隅の破片。周囲の幅1.5cmは厚さ1.0cmで、隅に0.35cm角の釘孔がある。紋様部分は周囲より0.5cm高い。紋様は破損するが、五弁の蓮華座と左脇侍の脚および衣紋の一部であろう。一段低い周囲を含め、表面には薄い白土の上に赤色顔料(ベンガラか)を塗っている。大きさは5.8×3.8cm。

もう1点は、側面がわずかに残る、5.5×3.5cmほどの破片。縁は紋様部分と同じ高さで、段差はない。衣紋のような波状の紋様があるものの、上下左右を特定できない。やはり表面に白土と赤色顔料が塗ってある。

壁土 総計179kgの壁土が出土した。スサを含む粗壁土の上にきめの細かい上塗りをし、漆喰で仕上げた壁の断片である。大土坑SK690出土量が19.25kgに対し、焼土層からは144.66kgと7.5倍の量が出土した。漆喰表面に彩色と思われる痕跡が認められる資料もある。飛鳥では山田寺に壁画の出土例がある⁹⁾。

まとめ 今回は、川原寺裏山遺跡には遠く及ばないとはいえ、出土数としては伽藍中樞部ではかつて例がない数の磚仏が出土した。さらに、川原寺裏山遺跡を含め、これまでの川原寺の磚仏が方形三尊Aに限られていたのに対し、多様な種類が出土したことも特筆される。

小型独尊磚仏について遺構層位別でみると、暗茶褐色焼土を埋土とする大土坑SK690の出土点数が群を抜く(102点81%)。方形三尊磚仏Bも15点中14点、そして1点のみの火頭形三尊磚仏も同じ遺構から出土した。ほかの2種の磚仏もやはりこの遺構からみつまっている。これらに対して、大型方形三尊磚仏Aは2点とも表土層出土で、大土坑SK690からは出土していない。逆に、川原寺裏山遺跡からは、方形三尊磚仏A以外はみつからない。さらに、小型独尊磚仏と方形三尊磚仏Bは頭光周囲にC字形忍冬紋を飾る意匠が共通する点からも、今回出土した6種類の磚仏は、方形三尊磚仏Aとそれ以外の5種、という2群に区分することができよう。

川原寺裏山遺跡では磚仏とともに塑像が多数出土した。これを塔本塑像とみて、方形三尊磚仏Aは川原寺の塔の壁を荘厳していたとみる説が有力である。ならば、今回みつかったこれとは別の一群の磚仏は、どこにあったか。それは中金堂であろう。小型独尊磚仏が数で多くを占めていることや火頭形三尊磚仏の使用法など、解決すべき課題はあるが、今回の調査区の位置からしてもその可能性は十分高いものがあると考ええる。

方形三尊磚仏Bが中金堂、方形三尊磚仏Aが塔、にそれぞれ使用されていたとするならば、両者の年代論¹⁰⁾にも影響を与えるであろう。

さらに、火頭形三尊磚仏(萩原分類B¹¹⁾)は、中国西安出土の同型品が知られ、これを玄奘発願「十俱胝像」に相当する「善業泥」とみる説があり¹²⁾、また、その日本への将来者を道昭とみる説¹³⁾がある。わが国での磚仏製作の契機や用途をはじめ、多方面にわたって磚仏研究に問題をなげかける資料群といえよう。(花谷 浩)

4 成果と課題

経楼もしくは鐘樓の発見 今回の調査は、川原寺中心伽藍としては48年ぶりに一定面積を発掘し、想定どおり礎石建物を検出した。川原寺における伽藍主要建築の発見は東門(1974年検出)以来となる。伽藍における位置は、中金堂と講堂の中間西方にあたり、法隆寺西院伽藍の現存建物や、後世の建物ながら唐招提寺の遺例、興福寺の現存遺跡などから、経楼もしくは鐘樓の遺構と考えて誤りない。経楼と鐘樓は、現存遺構のほか資財帳などの文献史料を見ても(表14)、一対でほぼ同規模の例が多く、川原寺でも伽藍中軸線を挟んだ東側には、今回発見した遺構と同形の建物を想定できる。

経楼と鐘樓の位置関係は、法隆寺西院伽藍(鐘樓が東、経楼=現経蔵が西)や唐招提寺(鐘樓が西、経楼=現鼓樓が東)の例からは、伽藍中軸線を挟んでどちら側にいずれの建物を置くかは一定していない。また今回の出土遺物には建物の機能を特定するものはない。後述する遺構の特徴から、かなりの重量を支持する建物と想定できるけれども、建物の機能は特定できない¹⁴⁾。

経楼・鐘樓の発掘調査による検出事例は、全国的にみても多くない(表14)。とりわけ7世紀にさかのぼる事例は、山田寺(奈良県桜井市)と杉崎廃寺(岐阜県飛騨市、7世

表14 古代寺院の経楼・鐘楼等

	棟方向	桁行(柱間寸法)	梁行(柱間寸法)	棟通の柱	基壇規模	備考	出典
山田寺	南北	19.5(6.5×3)	16.5(5.5×3)	総柱	不明	礎石遺存、校倉	山田寺発掘調査報告
川原寺	南北?	21(7×3)	14?(7×2?)	なし	39×32?		今回の調査
杉崎廃寺	南北	15(5×3)	11(5.5×2)	なし	21×16	礎石・基壇遺存	杉崎廃寺跡発掘調査報告書
法隆寺西院経蔵	南北	30.5(8.4, 13.7, 8.4)	16.8(8.4, 8.4)	あり	軒の出6	現存建物	奈良六大寺大観 法隆寺伽藍縁起并流記資財帳
興福寺	南北	34(11, 12, 11)	22(11, 11)	あり	不明	地上露出	南都七大寺の研究 興福寺流記
薬師寺	南北	37.5(12.5×3)	25(12.5×2)	不明	66.5×54	階段遺存	薬師寺発掘調査報告 薬師寺縁起
大安寺	南北?	?	25(12.5×2)	不明	?×50	北妻を発掘	奈良国立文化財研究所年報1975 大安寺伽藍縁起并流記資財帳
法華寺	南北	23(7, 9, 7)	14(7, 7)	あり	31.8×22.7	凝灰岩礎石	法華寺本堂南門鐘楼修理工事報告書
甲賀寺	南北	31(10, 11, 10)	22(11, 11)	なし	不明	地上露出	近江の古代寺院
多賀城廃寺	南北	30(10×3)	15(7.5×2)	あり	不明		多賀城調査報告Ⅰ
陸奥国分寺	南北	30(10×3)	20(10×2)	あり	不明		陸奥国分寺跡
武蔵国分寺	南北	31(10, 11, 10)	20(10, 10)	あり	不明	柱間解釈各種	新修 国分寺の研究
常陸国分寺	南北?			不明	53×?	掘込地業検出	新修 国分寺の研究
信濃国分寺	南北			不明	35.6×19.8		新修 国分寺の研究
紀伊国分寺	南北			不明	46×33?	基壇東縁を検出	新修 国分寺の研究
讃岐国分寺	南北	21(7×3)	14(7×2)	なし	30×23程度	雨落溝がめぐる	讃岐国分寺跡 昭和59年度概報
唐招提寺鼓楼	南北	17.7(5.4, 6.9, 5.4)	13(6.5, 6.5)	床束	軒の出7	鎌倉時代、現存	奈良六大寺大観

単位：尺、いずれも唐大尺（1尺=0.292~0.303mに統一）

紀末～8世紀代)しかなく、山田寺は回廊外に建てられた校倉と想定されるため性格が異なる。後述するように、礎石建物SB700は中心伽藍の創建より若干遅れる可能性があるものの、全国的にも経楼・鐘楼遺構の最古の事例にあげることができ、これまで実体が不明であった7世紀官寺の経楼・鐘楼の究明にきわめて大きな意義をもつ。さらに古代寺院の伽藍建築のあり方を考えるうえでも重要である。

遺構の特徴 礎石建物SB700は次のような3つの特徴をもつ。

①礎石が巨大。礎石はいずれも塔心礎と見まがうほど巨大で、中央に造り出した円形柱座は径約1mと、川原寺の主要伽藍建築のなかでは最大である（中金堂；75～80cm、塔；70cm前後、南大門；95cm前後）。柱径は65～70cmだろう。ただし中金堂、塔、南大門とも、円形柱座の外側に方形座をつくり、また壁の入る柱間には地覆座をつけるが、今回検出した礎石にはそれらがなく、省略したものと考えられる。このように、巨大な礎石の上面に円柱座をつくって平滑に仕上げる特徴は、他の堂塔と共通し、SB700は7世紀後期の川原寺創建と一連の流れで建てられたとみて間違いなさそう。

②小さい柱間寸法。柱間寸法は7尺と小さい。表14のように、現存する法隆寺西院経楼（経蔵）・鐘楼は比較的小規模ながら梁行が8.4尺あり、資財帳や既往の発掘成果から知れる平城京の官寺では、梁行が10尺を越える。柱間7尺等間のSB700は、その礎石の巨大さに比して、柱間寸法が小さいと言わざるをえない。この①・②の特徴から、SB700は重いものを支持する、もしくは建物自体が高いなど、上部構造が相当な重量となることに備えた特徴をもつと解釈できる。

③火災痕跡が2度。調査区全面を覆う焼土層と、基壇南方に掘られた土坑SK690がその痕跡である。SK690には

磚仏のほか、創建期と平安時代前期の瓦を含み、平安時代前期に補修を受けた創建期の建物が被災したと考えられる。文献史料から想定される9世紀中～後半の火災に相当するものだろう。

2回目の火災は、基壇内外に広がる焼土層④からうかがえ、多量の焼壁片の存在からSB700が被災したと考えられる。焼土層④に平安中期以降の瓦を含むことから、建久2年（1191）の火災によるものと見て間違いはない。

文献に見える室町時代後期の火災については、明確な痕跡がないが、③層に混じる炭がその傍証になるかもしれない。

『報告』では、9世紀中～後半の火災に関する文献を認知していなかったため、最初の火災を建久2年に結びつけ、つぎの火災を室町時代後期にあてている。中金堂背後の小トレンチでは、焼土を含む土層を4層確認しており、今回の調査で確認した土坑SK690の埋土に焼土を含む層が複数あることなどを参考にすれば、今回の調査の層序と対応する可能性がある。『報告』にみえる中金堂を含む遺構の時期やその造営・改修に関しては、その後の発掘成果から再検討する余地があるだろう¹⁵⁾。

遺構の変遷 今回の調査区では、川原寺創建以前の様相については明確な遺構や土層を確認できなかった。

SB700の創建にあたっては、周囲を整地しながら基壇範囲に玉石を置いて囲い、基壇を積みながらさらに周囲の整地をすすめるという、基壇の築成手順をつかむことができた。SB700の礎石は、創建以後、復興の際に据え直しているものの、大きく動かさずに再建している。創建期の基壇外装は、基壇築成とともに据えた玉石を地覆石とし、凝灰岩製の羽目石を立てた構造と推定される。これは西金堂や中門と同じ仕様だが、西金堂や中門では石組みの雨落溝をつくるものの、SB700にはなく、基壇の版築をおこなっていないこと、礎石に地覆座をつくらな

いことと合わせて、伽藍前面の建物よりやや簡略化しているようだ。なお、SB700の創建年代は、創建基壇土に瓦片が混じることから、中金堂などより若干遅れると考えられる。ただし、これは堂塔造営の順序が現れた工程の差とみるべきだろう。

最初の火災後、SK690を掘って中金堂関連の遺物を埋め、SB700の基壇南辺部を再構築するが、雨落溝SD706の存在から、少なくとも基壇南辺は凝灰岩列SX701とほぼ同位置と想定される。なお、2度目の火災の焼土層④が礎石上面よりも下に堆積していることから、2度目の火災前後には、基壇土が流失し、礎石が露出して浮きあがった状態になった時期があるらしい。

2度目の火災後は、この火災にともなう焼土層④を基壇土として利用し、一部割れた礎石を据え直している。また、焼土層④を掘り込み、凝灰岩石列SX701・702を基壇外装とし、SD705を雨落溝とする。創建期の凝灰岩製羽目石を転用したと考えられるが、最初の火災後に再建した基壇を踏襲している可能性もある。

建物の上部構造 SB700の基壇最下部は、当初が玉石、再建期が凝灰岩と変遷し、柱真からの出は、当初が約2.2m、少なくとも2回目の再建後が約2.6mである。とりわけ再建期には、柱間寸法が小さいにもかかわらず、基壇の出、すなわち基壇を覆う屋根の出（軒の出）が大きく、それを実現するために、柱上に二手先もしくは三手先といった、やや複雑な組物を備えていたと考えられる。さらに2回目の再建期は、柱真からの基壇東辺および南辺までの出が等しく、入母屋造もしくは寄棟造の屋根を想定できる。創建当初の基壇の出からは、単純な組物で垂木を二軒とする構造を想定できるが、軒先の位置を示す雨落溝が明確でないため、あるいは創建期の建物形態が再建期にも反映されている可能性を否定できない。

いずれにせよ、遅くとも2回目の再建、すなわち建久2年火災後に再建された建物は、太い柱を立てた軒の出の大きい建物と推定され、創建期に劣らない本格的な建築だったろう。『報告』によれば、建久火災後には西金堂や中門、回廊等は再建されなかったようだが、塔は創建礎石や心礎の上に別の礎石を重ねて復興している。これらの再建の様相から、少なくとも鎌倉期の復興は比較的充実しており、その歴史的評価について再考する視点が生じていると思われる。

(箱崎)

註

- 1) 『川原寺発掘調査報告』奈文研、1960年。以下、単に『報告』と略す。
- 2) 『川原寺寺域北限の調査 - 飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告書 -』奈文研、2004年。なお、川原寺の歴史とこれまでの発掘調査の概要は、この報告書にまとめられている。
- 3) 網干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物（撮記）」『仏教芸術』99号、1974年。松下隆章ほか『研究発表と座談会 川原寺裏山遺跡出土品について』仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第4冊、1977年。
- 4) 前掲註1)『報告』38頁、PL.52。
- 5) 前掲註3)の2誌。出土点数に関しては、完形品が約30点あり、天蓋上部宝珠の部分が約160点ある、と報告されている。なお、同遺跡はその後に盗掘を受け、その際にも磚仏が出土した。飛鳥資料館『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』1991年。
- 6) 大脇潔「埴仏と押出仏の同原型資料 - 夏見廃寺の埴仏を中心として -」『MUSEUM』No.418、1986年。
- 7) 清水昭博「出土状況からみた埴仏用法の検討」『考古學論攷』第19冊、奈良県立橿原考古学研究所、1995年。
- 8) 前掲註6)大脇論文、および『昭和53年度平城概報』、倉吉博物館『埴仏 - 土と火から生まれた仏たち -』1992年、参照。同原型の押出仏が当麻寺にある。なお、鉄釜鑄造遺構などを含む金属工房跡と北面の掘立柱堀を検出した、川原寺寺域北限の調査で出土した小型独尊磚仏も同型品と判明した。前掲註2)。
- 9) 『山田寺発掘調査報告』奈文研、2002年。
- 10) 清水昭博「埴仏製作の様相 - 図像分析を中心とした方形三尊磚仏Aの成立についての検討 -」『橿原考古学研究所論集』第12、吉川弘文館、1994年。
- 11) 萩原哉「第6節 埴仏」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第25集、山城国府跡第54次（7 XYS'UD-4地区）発掘調査報告、2003年。
- 12) 萩原哉「玄奘発願「十俱胝像」考 - 「善業泥」埴仏をめぐる -」『佛教藝術』261号、2002年。
- 13) 浅井和春「型押し仏像 - 埴と銅版 -」『名品でたどる - 版と型の日本美術』町田市立国際版画美術館、1997年。
- 14) 東大寺の梵鐘（奈良時代）は、古代最大を誇り、口径2.7m、高3.0m、重量は26.3tという。坪井良平『日本の梵鐘』角川書店、1970年。それを支える鐘樓（鎌倉時代初期）は、構造形式がSB700と異なって方1間であるが、柱径が85cm前後である。奈良時代までの梵鐘は形状が大きい特徴が指摘されており（前掲坪井著書）、東大寺の梵鐘ほどでなくても、かなりの重量を支持する必要があったと考えられる。ただし、経楼も同規模・同形態だったとすれば、同規模の礎石を使用した可能性があり、SB700と中軸を挟んで対称となる東側の建物位置の調査で、それを確認する必要があるだろう。なお、経楼とすれば、『日本書紀』天武2年（673）に「一切経を川原寺に写したまふ」と記載のある、一切経が収蔵された施設と考えられる。
- 15) 1993年度におこなった南門周辺の調査では、『報告』で創建当初と想定した玉石列が、少なくとも後世の手が入っていることは確実で、創建当初とは断定しがたいとし、『報告』の見解について検討の余地があることを指摘している。『藤原概報25』。